

## 私の戦争苦勞の思い出

徳島県 東 晴 告

昭和十五年三月十五日、海軍軍属で従軍し、南支海南島に上陸して二年間勤務、十七年一月二十五日に帰宅した。

内地の戦争状況はますます過酷な状態で、男も女も防空演習やら竹槍訓練で、また十七、十八歳の若い者も、軍需工場へ、徴用工として強制的に連れて行かれた。なかには親もとをはなれるのが悲しくて泣きながら行く子もあつたと聞いた。物資は不足がちで、すべて物が配給制になって生活はしだいに苦しくなつて来た。

帰宅後は、いつ赤紙の召集令状がくるかと寝てもさめても落ち着かない毎日であつた。

翌年の七月一日に「七月十日に入隊せよ」という。来るべきものが来た。役場から特配の酒を一升もらつてきて、身内の者で形ばかりのかどでをいわつて、家を出る

ときあどけない長女は、

「おとおどこへ行くの、夜さはもどつてくるんかあ」  
ときかれたとき

「うんこんどは、なんぼ夜さもなんぼ夜さもとまつてくるけん、おかあのことをよう聞いてりこうさんしてるんだ」

といい聞かせた。出産がまじかくなつていた身おもの妻は、当時県道にびんじょうした三輪車が待つてくれるところまで一キロ近くあるので、「私は家で見送るから気をつけて」とめがしらをおさえて涙声でわかれを上げた。家を出るときこれが妻子のわかれと、我が家の見おさめになるかも知れないと悲しい思いをしたことが、今ものうりにしみこんでいる。

入隊して聞いた話だが、ある兵隊は妻が子供二人をつれて毎日のように兵舎のうらにきていたとのこと、ついに妻子とのわかれをはかなんで兵舎を夜半に脱走し、親子四人がつなでしりあつて入水心中したという、戦争がうんだなげかましい悲劇がある。

いよいよ野戦に出発がきまり、我々の部隊は、フィリ

ピンへ行くことになった。門司を出航、輸送船は軍の秘密でくわしいことはわからなかったが、五、六千屯級の貨物船であった。この船にはほかの部隊のびんじょう兵も入れると八百人ほどではなかったかと思う。船内に柵をつくり二段にした。したの段の者は立つと頭がつかえ、また畳二枚じきのところに十人で、装具をおくと横になって寝ることもできず、甲板にありがたいが敵の潜水艦に見つかるからねらわれるので甲板にはあがれず、赤道のしたあたりを通過する時などは、船内はむしぶろのようであった。

この時だれかがこれがわれわれ野戦要員をおくる輸送船かとこぼすと、これが戦争に勝ちぬくための決戦輸送だ、もんくをいうなど、ぎゃくに叱られたひとまくもあつた。

このくるしい航行中、バシー海峡あたりだったと思う。夜の十時ごろ、体をゆさぶるような振動を感じたと思つたら、船内スピーカーが

「魚雷警報、全員装具を持って甲板にあがれ」  
の命令と同時に不気味なごうおんがした時は、もうこれ

はだめだなあと思い、生きたこちはしなかった。しばらくしてまたごうおんがした。

夜があけてみたら、われわれ十三隻の船団のうち二隻が魚雷にやられていた。そのあわを眺めて乗組員のご冥福を祈つた。

それから数日後にマニラ港に上陸、ここで我々の部隊の任地が南部ルソン島のダエト地区になった。われわれの中隊はさらに南下して、マンプラオの港町で三菱鉱山や石原産業の銅や鉄を発掘している所の警備が任務のようであった。

任地に着いた一か月ぐらいはあんがい静かであった。土民の話ではマッカーサー元帥が本国へ反転準備に行っているから準備がおわれば再度帰ってきて日本軍を全滅させると言っていた。ほどなく一か月が過ぎたと思つたら、毎日のようにわれわれの警備しているマンプラオ港にも敵機が飛んできた。また港町だから敵兵が上陸するかもしれないって毎日陣地構築の壕堀りの勤務だ。なにぶん、日本軍は物資不足で、兵器も敵の押収銃を使用したり、土民がこれはただの紙くずだといっている軍票

を無理やりに押しつけて、米やらトウモロコシ、芋などを徴発してきたが、少量なのでいつも空腹での突貫工事の壕掘りは苦しかった。

どうにか陣地も完成したのは状況がますます悪化したころではなかったかと思う。レイテ島が玉砕し、南部ルソンは危険だから全部隊は中部ルソンへ集結せよとの命令があったので、任地を出発して集結地をめざして毎日夜行軍である。

昼間はわれわれの行軍をねらって敵機が何回となく旋回して来るので、昼間は土民の家やジャングルの中で休養する。こんな状態が毎日続いたので睡眠不足になり、また食事の準備をするのに飯盒を鉢合わせたりして金属音を出すと、電波探知器で聞きつけられ、すぐ敵機がひらいということ、食事の準備にも大変であった。

マンブラオを出発してから十日目ぐらいではなかったかと思う。睡眠不足やら栄養不足と毎晩の行軍でつかれがでてきて、午前二時ごろ小便をしかけたら、前立腺あたりから尿道にかけて痛みを感じ、小便をするのがたいへんだった。歩くにも前立腺あたりを手でおさえて歩い

た。夜があけて小便をみたら血がまじっていた。

こんな症状の者が中隊にも五人ほどいるから、すこし休養をすればなおるということで、ちょうどジャングルのところであったので二日ほど休養をとる。衛生兵が、強壮剤だといって注射を一本打ってくれただけで、別に手当もしてくれることもなく二日間の休養が終わると、また引き続き行軍で、やっと目的地の中部ルソンのカクヤンというところに着いた。

ここは兵站部のようなところらしかった。ここで任地が決定するまで、二、三日休養した。われわれの中隊は一番不便な過疎地区のルソン島の東海岸のハラナン部落の警備に行くことになった。シエラマドレ山脈をよこぎって、峯をこえ谷をわたり、途中四泊野宿をして、やっと目的地の警備についた。しばらくすると、アバリ地区に警備をしていたという四、五人の兵隊が、東海岸のパラン部落のほうへ行けば食糧があると聞いていたので来たという。シエラマドレの山のなかを南下しながらかなたこなたとまよいながら、アバリを出てから三十日ほどになる。途中で食糧が欠乏して谷川などでは蛙や

蛇、みみず、木の芽、草の葉など、飯盒で煮たらたいていなものは食えたといっていた。

またアパリで米軍が上陸した時、警備していた二百人ほどの者が、山へ逃げこんだ。そのうちに中部ルソンのほうへ行った者もあるが、病気の者や体の弱い者などはほとんど病死やら餓死したのではないかと思うといっていた。また、この兵隊たちが来た時、ちょうど雨がしょぼしょぼ降っていた。顔も頭も髪はのびほうだいで、体も被服もよごれてズボンはやぶれ、いいわけにはいっているということであった。これをみた時、屋島の壇の浦合戦にやぶれた平家軍のおちうどが、これも同じく山中へ逃げ散った時のかたりぐさに、

「矢つき刀おれ 猛將落ち行く 春の雨」

とはこんな時のことではないかと思った。

戦争さえしなければこんな苦勞はしなくてもよいのに、誰いうともなくさびしくささやきあったことも思い出す。

まだまだいたましい話を聞いたが、フィリピンのバギヨウというところは、海拔一千メートルほどあがった平

たんにあるすずしい避暑地である。日本軍も重病患者の療養所をつくり、当時患者が二、三十人はいただろうとの話だった。戦争状況がますます悪化してきたのでやむをえぬことであつたのだろうとは思ふが、患者にいつわりをいって、殺す注射をして全員死亡させたとのこと。

このときある一人の患者がどうも衛生兵のいうことが合点が行かぬ、身動きもようようの重患者が注射一本ぐらいで元気になり、病院船に乗船して内地へ帰ることが出来るはずがない、帰るといってもなんの帰還のことだと思つて、病舎を抜け出して、近所に住んでいた土民のところへいき、事情をはなし助けをもとめて助かったと聞いた。

人命尊重のやかましい文明の時代に、注射を打つて人を殺すなんてあつてはならないことであるが、これも戦争がおこした実になげかわしい無謀なしわざである。現在のような平和な時代の者にはなしても、注射を打つて人を殺すなんて考えられないと疑がうだろうと思ふが、兵隊のはなしもまんざら創作のようでもないように思いました。

十月八日の夕方、米軍の偵察機に日本の将校が一人同乗して、自分等の宿舎がわりにしていた小屋の前の野原に着陸して、中隊長としばらくはなしをして帰った。その時、隊長はすでに無線で内地が終戦になっていていることは知っていたが、隊長のなかにはがらのよくない者もいるので、どんなでたらめをしでかすかもしれないと、心配して発表はしなかった。

それから数日後にパラナン部落の浜へ集結していたら、米軍の上陸用船艇が迎えにきて、北サンフェルナンドの港町に着いた。ここで捕虜収容所に入れられ、はげしい毎日の作業があったが、最初のうちは給食が悪く、雑炊のようなものが飯盒の蓋に半分ぐらいということ、空腹と疲れでふらふらになって、まるでやみあがり病人のようになってた。

ある兵隊は朝起床せずに寝転んでいたら巡視にきた女兵士に「ジャパン起きろ」と靴で頭をけられた。こんな嘆かわしい思いをしたことは初めてだとこぼしていたのを、みんながつまらぬ戦争をして負けたのだから、仕方がないではないかと、慰め合ったことも思い出す。

しかしこんなことも自分のあいだで、じょじょに給食もよくなり、演芸会などの娯楽設備も心配してくれて、やはり紳士国だなあと、あとでほめてやったことだった。

昭和二十一年十二月二十六日復員、名古屋に上陸してみたら、西をみても東をみても焼け野原であった。足掛け四年目にやっとわが家に落ち着き、元氣な家族の顔を見てほっとすると同時に、さあこれからは軍人会に行くこともなければ召集令状も来る心配もない。あの戦地でした苦勞を思えばなんでも出来る、敗戦の復興をめざして平和な国作りのためにがんばらねばと誓うとともに、いかに他国人であろうとも、若いもの同士が殺しあいをするというつまらぬ戦争は、二度と繰り返してはならぬと誓ったものである。